

日本十二支考〈龍〉現代文化篇

―東アジアにおける日本の龍と現代文明―

濱田 陽・李
珣淑

- 1 東アジアの龍文化―龍と蛇の出会いのドラマ
- 2 三つの性質を合わせもつ龍
- 3 ユビキタスな運動体
- 4 近代文明による龍文化の喪失
- 5 地球環境問題と自然の聖霊

1 東アジアの龍文化―龍と蛇の出会いのドラマ

辰^{しん}＝龍は、想像上の生き物である。頭はラクダ、角は鹿、目はウサギ、耳は牛、項^{うなじ}は蛇、腹は蜃^{しん}（蜃気楼をつくりだす想像の動物）、ウロコは鯉、掌^{てのひら}は虎、爪は鷺^{わし}に似るとされる。異なる部族間の争いを避け

るために、それぞれの祖先と考えられ、崇拜されてきた動物をすべて融合させたとする説もある。

近年の発掘調査によって、東アジアの龍の起源は、少なくとも七千年前にさかのぼることが明らかになった。しかも、中国東北部の龍の遺跡（内モンゴル自治区東部から遼寧省にまたがる興隆窪遺跡、小山遺跡、査海遺跡、紅山文化の諸遺跡）は、畑作牧畜文明起源であった。面白いことに、太古の龍の住処は大河ではなく、山であることも分かった。

しかし、現時点では、中国南部の長江流域の稲作漁撈文明からは、良渚文化に属する五千三百年前までの龍の遺跡しか見つかっていない。現在の発掘資料からは、七千年前の河姆渡文化にまでさかのぼるこの長江文明は、もともと太陽、太陽を運ぶ鳥、そして、蛇にたいする信仰で特徴づけられる文明だったと考えられている。

龍文化の伝播にまつわる興味深い仮説は、五千七百年前と四千二百年前の二度の寒冷化により、中国東北部で畑作牧畜を営んでいた人々が南下して龍の信仰を長江文明に伝えた結果、山の龍が水神としての属性を手に入れていったというものである。つまり、龍は蛇から誕生したのでなく、龍と蛇の信仰は、別々の起源をもつことになる。

龍と蛇の出会い、長い時間をかけて大陸と半島で起こっていった。そこには、衝突・共存・共生・支配などのドラマがあった。そして、その龍が弥生時代後期までに日本列島にも伝えられた（縄文時代には龍の遺跡は発見されていない）。中国・韓国の龍は、すでに水神としての性質をそなえていたが、日本において、またあらためて土地の蛇神と出会った。こう考えると、日本の龍も、東アジアにおける龍と蛇の



図1「華原磬 国宝 唐時代 興福寺蔵 奈良県」

中国で鑄造され日本に伝わった名宝。

出典：勝木言一郎『日本の美術 第510号 龍』至文堂、2008

出会いのドラマの一ヴァリエーションととらえられよう。

ところで、中国・韓国から日本に伝えられた龍は、権威性が強く、水神ではあるが蛇そのものの形象と明確に異なる。弥生後期に伝来した中国製青銅鏡、古墳時代に韓国・中国との交流でもたらされた帯金具・装飾金具・大刀・金冠に鑄出された龍はたいてい四足があり、これらは権力者ゆかりの品々である。しかし、弥生人が水を入れる壺に描いた龍は四足をもっていない。龍が日本の土着の水神とあらためて出会うことによって、いっそう蛇に近づいた図像が多くなっていったのだろう。もし、中国・韓国の龍と違いがあるとすれば、それは、日本の龍の方が、地域色が強く権威性がいくぶん中和されていることだろう。

2 三つの性質を合わせもつ龍

さて、日本の龍に注目すると、大陸の龍、仏教の龍、土着の蛇神の三つの要素が溶け合っていることがわかる。

大陸の龍の例としては、天皇の即位式に用いられた礼服、こんりようのぎょい袞龍御衣がある。天かける龍によって權威を示した中国皇帝の礼服を模したもので、おおそで大袖に龍の刺繡がほどこされていた。唐の律令文化の影響を受けて大宝律令が定められた七〇一年から取り入れられ、明治天皇の父にあたる孝明天皇の代まで用いられた。また、奈良県明日香村で発見された7世紀末頃の貴族の墓で有名な高松塚古墳は、韓国・中国の壁画古墳と酷似し、東に四神の一つとして青龍が描かれている。大陸的な陰陽五行思想にもとづいた龍である。

仏教の龍は、密教僧・空海が平安京の庭園、しんせんえん神泉苑の大池で行った雨乞い（八二四年）の話が有名である。七日たっても効果がないため、空海はインドから仏の守護神、龍王を呼び寄せた。龍王は、大蛇の頭に乗った小さな金色の龍の姿で現れる。この龍王の力により、三日間大雨が降り続け、五穀豊穡をもたらすことができた。以降、平安時代には神泉苑での雨乞いが慣わしとなった。

土着の蛇神は、各地にみられ、やまたのおろち縄文土器にも蛇が数多く描かれている。『古事記』、『日本書紀』では、頭と尾が八つあるという八岐大蛇や、奈良の三輪山を御神体とするおおみわじんじや大神神社にまつられたおおものぬし大物主の神が、蛇神として有名である。

以上をみると、大陸の龍は權威性、仏教の龍は守護性、土着の蛇神は土地との近接性を特徴とすること

がわかる。大陸の龍はさまざまな動物を融合させた創造物として天にのぼり、圧倒的な権威を発揮する。仏教の龍は、仏の教えを守る守護神として、人々に恵みをもたらす。土着の蛇神は、脱皮し毒をもつ蛇の力によって生と死の循環を連想させ、土地と結びつく。

ところで、どうしてこのように系統が異なり性格もちがう龍が、互いに溶け合い多彩なキャラクターを備えることができたのだろうか。

それは第一に、龍が動的な、見えながら見えない存在であったためだ。龍は動いている。あるいは静止していても常に動く可能性を秘めている。また、見えても一瞬であり、普段は見えない。このような存在であれば、一つの性質の龍に固定されなくともよい。



図2 「善女龍王図 長谷川等伯
室町時代末期 石川県七尾美術館蔵」
出典：石川県七尾美術館HP



図3 「縄文式土器 縄文時代中期 堂の前遺跡 山形県」土器面を蛇模様が横断する。
出典：『縄文人の祈り』塩尻市立平出博物館、2006

第二に、龍が日本各地の風土そのものに結びつく空間性を獲得したためだ。それには、地上だけでなく洞窟の入口などを龍穴^{りゅうけつ}と見立てた地中世界も含まれていた。

そして第三に、大陸の龍と土着の蛇神が溶け合うために、おそらく仏教の龍が仲立ちをしたことである。権威だけではよそよそしい。近接しているだけでは威厳がない。権威をもつて側にいる。遠いながら近い存在。真の守護者とはそのようなものであろう。仏教の龍がいなければ、日本の龍文化はこれほど多彩にならなかったかもしれない。仏教の龍はもともとインドの蛇^{ナガ}に由来し、大陸性と蛇の要素を合わせもつことから、両者を結びつけるのに一役買うことができたのだろう。

3 ユビキタスな運動体

こうして日本の龍は、權威性、守護性、近接性の三つの性質を溶け合わせ、国中に根付くことができた。そして、ユビキタスな運動体となった。ユビキタス (ubiquitous) とは、どこにでも存在するという意味の英語で、もとラテン語に由来している。マイクロチップを組み込んで環境をインテリジェント化するコンピュータ技術や、いつでも・どこでも・だれでも・何でもがつながるネットワークを総称しており、この言葉を用いれば現代人の感覚で龍を理解する手助けとなろう。龍は、いたるところに現れる可能性もちつつ、動いている。じっとしていても、つねに動く可能性を秘めている。そして、風雨と雷鳴をもたらし、地震や噴火を起こすことができる。

近世までの日本には、このような龍の信仰が生きていた。龍の存在によって、儒教の哲学、仏教の法 (dharma)、土地の固有信仰が結びついていた。一つの思想や信仰に閉じこもる思考は、動かないものに対しては可能である。しかし、このユビキタスな運動体は、一つのイメージ、一つの観念だけで固定的にとらえることはできなかった。古の人々は生きた動的な存在をとらえるために複数のイメージを投影させた。社会階層の違いにより貴族、武士、民衆はそれぞれ異なった龍の造形を描いているが、それらはもとと同じ龍であり、ユビキタスな運動体の片鱗をとらえたものである。

龍は人々の生活に直結していた。雨を降らせ、また、止ませることで農業に大きな影響を及ぼしたことはいうまでもない。地震や噴火を起こすことで、人々に自然への畏れを抱かせ、この世の無常を悟らせた。

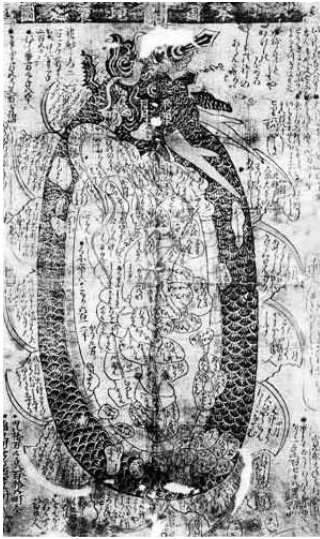


図4 「大日本国地震之図 1624」
国土を取り巻き、守護する龍。
出典：黒田日出男『龍の棲む日本』
岩波新書、2003



図5 「室生龍穴 奈良県」
日本三大龍穴の一つ。

同時に龍は人々を守ってくれる存在であった。龍がいなければ国土の守護を発想できない世界観があった。たとえば、伊勢神宮の心の御柱みはしらを取り巻いて守護していると考えられたのも龍であった。神宮は太陽神で皇室の祖先神の天照大神あまてらすおおみかみをまつる。心の御柱は、神宮の正殿床下とっこにあり、日本の国土がゆらがらないよう固定し、安定させる中心軸の一つと考えられた。また、独鈷とっこという密教の法具の形をしており、これを守る龍は、白い蛇の姿をしていると想像されていた。神道を代表する聖地においても、龍の権威性、守護性、近接性の三つの性質が溶け合っていたのである。

これはほんの一例にすぎない。そもそも龍は、日本各地の無数の神社や寺院にある龍穴りゅうけつを通じて地上と地中を自由に移動し、各地を、自らのつくりだすネットワークによってつないでいると考えられた。

4 近代文明による龍文化の喪失

ところが、ユビキタスな運動体としての龍文化は、自然を人間の都合に強引に従わせようとした西洋近代文明の世界観・国土観の流入とインパクトにより、失われてしまうことになった。分析的な専門知識を駆使する近代文明に遭遇した東アジアの人々は、好むと好まざるとにかかわらず、自然と国土に結びついた龍文化を手放し、隅に追いやってしまった。

現代の龍は、ファンタジーの小説、マンガ、アニメの世界に封じこめられてしまった。私たちをわくわくさせてくれるファンタジーは人間の想像力の聖域サンクチュアリとして、たしかに素晴らしいものだ。しかし、私たちは本当にファンタジーの世界でしか龍に出会うことはできないのだろうか。

龍文化の遺跡の発見・発掘が相次ぎ、その歴史的スケールが明らかになればなるほど、皮肉なことに私たちから龍は遠い存在になっていくようにもみえる。博物館の遺品と多くの出土品をどれほど眺めていても、それだけでは生きた龍にふれることはできない。

初めて龍が生み出されたとき、そして、その形象が目、皮膚、口で伝承されていったとき、東アジアの先人たちは、畑作牧畜をし、稲作をし、雷に驚き、雨に打たれながら生きていた。だが、近代人は、山河や動物を感受し、想像をめぐらせることから遠ざかってしまった。いわば、龍を生み出した創造力の発動条件がなくなってしまったのだ。私たちは、動物園やテレビで、古の人々いにしえが目にした多くの動物を知るようになった。しかし、それらを融合させて龍のように気高い創造物を生み出すことはとてもできな

い。見えないものを描き、見えないものを信じることが、あまりにもできなくなっているためだ。

龍に出会えないことは、私たちをとりまいている世界を、権威性、守護性、近接性が合わさった統一体としてとらえられないことを意味している。では、どうすれば、私たちは再び生きた龍に出会うことができるのだろうか。どうすれば、龍を生み出した創造力を取り戻せるのだろうか。

5 地球環境問題と自然の聖霊

第一に、自然や動物に、専門領域に分離された哲学、科学、芸術によってだけでなく、自分自身の「魂」によって向き合うことが必要である。ここでの魂とは、対象を分割し、自分から切り離して客観的に知覚しようとする近代的思考に対して、そうして得た知識は真の理解にいたる断片にとどまると考え、対象の生きた姿を動的なまま謙虚にとらえようとする精神の働きである。これは、けっしてファンタジーの世界にとどまらない。

たとえば、東アジアの龍は、環境を象徴する格好のメタファーである。現代の環境問題には地球温暖化、生物多様性の喪失、水資源の枯渇をはじめ、ありとあらゆる分野が含まれている。それは、世界的でありながら地域性の強い課題である。環境の変化が自分や愛する人々にどのような影響を及ぼすかを察知するためには、専門家の意見に頼っているだけでは事足りない。誰もが当事者であり、必要な情報を主体的に集め、それらを総合的に把握し、自覚的に行動する必要がある。こうした魂を養うために、私たちは、龍

を生み出し育んだ先人の知恵を、新たな光のもとで評価すべきではないだろうか。

第二に、東アジアの龍文化を、西洋文化も含めた広い視野のもとで考察する姿勢が求められる。それには、これまでの東西龍文化比較とは根本的にちがった発想が求められる。西洋キリスト教の伝統では主に龍は神や聖人に退治される存在であり、悪の象徴として描かれてきた。それゆえ、東アジアの龍と西洋の龍の違いにいくら着目しても、西洋でつまかさなったイメージが障壁となり、真に実りある対話を切り開くことはできないだろう。したがって、東西の龍の単純比較ではなく、東アジアの龍を西洋において優れた融合性を示す、他の存在と比較してみてもどうだろうか。このような発想によって、シンボルとしての東アジアの龍の尊さを西洋の文化圏においても受け止めることができるようになるかもしれない。

そこで、唐突ではあるが、東洋の龍に權威性・守護性・近接性において比肩できる機能をもった存在を西洋文化に探し、靈的な結びつきとしての教会を挙げて比較してみればどうだろうか。教会の本来の意味は、救い主キリストのもとにある人々の靈的なつながりであり、建物のことではない。それは、龍と同じく目に見えない。そして、キリストによって一つの肢体のように結びつけられていると信じられている。たしかに東アジアの龍は、西洋の靈的な教会のように人間のつながりを中心にしたものではない。しかし、どちらも多様でありながら一つのまとまりを表現していることにおいて、また、それぞれの文化における尊さにおいて、同質の意義を見出すことができる。なぜ、東アジアの龍の形象は美しいのだろう。それは、常に動いているから。じっとしているなにも動きがあるから。そして、私たちが見えないものを見ようとしてきたからである。龍を動かす靈性は、キリスト教が説く聖靈に機能的に、どれほど近いことだろう。

聖霊は、風のようにどこからともなく吹き、また去っていくが、人々を訪れ、真の生命と愛をもたらすものと信じられてきた。これゆえに、人々は、それぞれに救い主キリストに出会い、霊的な教会の結びつきに入ることが可能となるのだ。

東アジアの龍は、たとえていえば、「自然の教会」であり、それを動かすのは、「自然の聖霊」である。その統一と躍動を、キリスト教の霊的な教会と聖霊から想像してみよう。そして、西洋の文化がこれらを尊んできたのと同じく、東洋の文化が龍を尊んできたことを訴えてみよう。このような機能的比較を発想し、新たな相互理解を試みることは、現代に不可欠な総合性を生かす文化を発想する上でも、欠かせない作業ではないだろうか。

龍はユビキタスな運動体として、さまざまな思想や文化の共存に大切な役割を果たしてきた。東アジアの多様な民族が大切にしてきた他の動物の文化象徴との関係を慎重に深く考察しながら、東アジアの龍文化の魅力と可能性を再認識し、総合性の精神を復権すべきときであろう。

主要文献

- 山中襄太『語源十二支物語』大修館書店、一九七四
 笹間良彦『龍 神秘と伝説の全容』刀剣春秋新聞社、一九七五
 橋本明治『竜の落とし子』日本経済新聞社、一九七九
 大場磐雄『十二支のはなし』ニュー・サイエンス社、一九八三
 小杉一雄他『日本の文様 龍・麒麟・鳳凰』光琳社、一九八四

諸橋轍次『十二支物語』大修館書店、一九八八

林巳奈夫『龍の話 図像から解く謎』中公新書、一九九三

南方熊楠『十二支考（上）』岩波文庫、一九九四

吉野裕子『十二支 易・五行と日本の民俗』人文書院、一九九四

柳宗玄『十二支のかたち』岩波書店（同時代ライブラリー）、一九九五

五十嵐謙吉『十二支の動物たち』八坂書房、一九九八

カール・シューカー『龍のファンタジー』別宮貞徳監訳、東洋書林、一九九九

那谷敏郎『龍と蛇（ヘナガ） 権威の象徴と豊かな水の神』集英社、二〇〇〇

萩原秀三郎『神樹 東アジアの柱立て』小学館、二〇〇一

黒田日出男『龍の棲む日本』岩波新書、二〇〇三

笹間良彦『図説 龍の歴史大事典』遊子館、二〇〇六

塩尻市立平出博物館『縄文人の祈り』塩尻市立平出博物館、二〇〇六

J・G・フレイザー『金枝篇 呪術と宗教の研究 第4巻 死にゆく神』、神成利男訳、国書刊行会、二〇〇六

安田喜憲編『龍の文明史』八坂書房、二〇〇六

勝木言一郎『日本の美術 第五一〇号 龍』至文堂、二〇〇八

高麗美術館『高麗美術館開館二〇周年記念図録』高麗美術館、二〇〇八

大阪府立弥生文化博物館『倭人がみた龍 平成二〇年度冬季特別展』中島弘文堂、二〇〇九

事典類

相賀徹夫編『大日本百科事典』第二巻、小学館、一九六八

下中弥三郎編『神道大辞典 トーワ』臨川書店、一九六九

- フランク・B・ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典』2、TBSブリタニカ、一九七二
- 村上重良編『皇室事典』東京堂出版、一九八〇
- 下中邦彦編『平凡社 大百科事典』第二卷、平凡社、一九八四
- 川口謙二編『日本神祇由来事典』柏書房、一九九三
- Cristiano Grottanelli, "Dragons, "Mircea Eliade ed. The Encyclopedia of Religion, Vol. 3, Macmillan Publishing Company, New York, 1993, D 431-436
- (財)古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』角川書店、一九九四
- 白川静『字通』平凡社、一九九六
- 『日本地名大辞典』第六卷(フー)、日本図書センター、一九九六(澤田久雄編『日本地名大辞典』第六卷、日本書房、一九三八の復刻版)
- 福田アジオ他編『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館、一九九九
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、『日本国語大辞典 第二版』第八卷、小学館、二〇〇一
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、『日本国語大辞典 第二版』第十三卷、小学館、二〇〇一
- 白川静『字統』平凡社、二〇〇四
- 蘭田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』吉川弘文館、二〇〇四
- 白川静『字訓』平凡社、二〇〇五
- 伊藤亜人監訳『韓国文化シンボル事典』川上新二編訳、平凡社、二〇〇六
- 上智学院・新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』第四卷、研究社、二〇〇九

付記

本稿は、財団法人・韓中日比較文化研究所(ソウル)の依頼により執筆した原稿を元にしており、韓国語版(翻訳 李 珣淑)

が『十二支神 龍』（李御寧編 センガゲナム出版、二〇一〇年十一月、原題『十二支神 용龍 한중일비교문화시리즈』이
어령 편 생각의나문）に、「東アジアにおける日本の龍と現代文明」（原題「동아시아에서 일본의 용과 현대文明」）として掲
載されている。